

台湾における日本時代の建築物を見る眼差し

——近年なぜ神社の「復興」が目立つのか——

武 知 正 晃

TAKECHI Masaaki

台湾首府大学応用外語学系日語組助理教授

The Eyes for Buildings of The Japanese colony times in Taiwan

—— In late years why is the revival of the Shinto shrine outstanding? ——

Abstract : In today's Taiwan, there is a trend to reconstruct shrines built during the era of Japanese colonial rule. This paper serves as the basis for discussing the background of this phenomenon, yet it does not adopt conventional methods of conducting a field study or collecting archival materials. Rather, two settings were selected to examine how information on Japanese shrines has been circulated, shared and consumed.

The first setting consists of activities to promote Japanese culture and international exchange as well as dissemination of information on Japan through commercial facilities and tourism magazines featuring the country. Under such circumstances, shrines are not captured in a historical context but instead described as a symbol of Japanese culture.

The second setting comprises social networks such as Facebook groups whose purpose is to discuss Japanese history and where images and information on Japanese colonial rule are shared. These groups, however, go beyond examining information of the past; they also talk about Japanese rites and rituals currently performed in Taiwan. Moreover, they use the knowledge they have acquired by participating in such ceremonies to search for images from the era.

This indicates a tendency to commingle the images of modern Japan and old Japan when it occupied Taiwan. On Facebook, the reconstruction of shrines has been discussed in reference to multiculturalism. This concept came into use to balance the interests of numerous tribes amid the Taiwanese localization movement after the state's democratization, and the term has been used in those discussions on the social network. The reconstruction of shrines itself is in question because some people associate them with the historical legacy of forced religion. Whether Taiwanese people will move forward with shrine reconstruction is yet unknown, but some small shrines have been rebuilt. Their views on Japanese culture introduced here may underlie this phenomenon.

はじめに

海外神社研究は、これまで歴史学・建築学・都市史研究・神道研究といった分野の研究者が領域横断的に行ってきた研究分野である。その大半は「戦前」、日本の植民地支配が存在していた時期を対象とする研究であり、「戦後」の海外神社跡地に関する研究については近年になり、ようやく注目を集めるようになった。戦後の海外神社跡地の状況について、いくつかの神社が「復興」された事例がある⁽¹⁾。中島によると、「復興」された神社の一例に、南洋諸島の神社群があるが、これについては日本の「民族派」からの影響と地元の観光振興のためだとしている。南洋諸島以外で「復興」の事例が見られるのが台湾である。本論文は、近年台湾で見られる日本統治時代の神社の「復興」という現象をどのように理解するのか、そのための試論である。

I 本論の視点

中島三千男によると、1990年代以降、海外神社の研究が進展するも、その大部分は海外神社が機能していた戦前の研究であり、海外神社の戦後の動向についての研究は皆無であったとしている。戦後の海外神社の跡地利用について、「その変容の仕方から、その地域と戦後日本との関係、あるいは、その地域の、日本との関係を含む歴史や政治・経済・文化の問題を読み解くことができる」と主張している（中島 2013：12-13）。さらに、中島は、「大日本『帝国』の支配下にあった地域や国々において、一定の時が流れ、経済的な発展を遂げ、さらに成熟した社会になるにつれ、「歴史的問題」は「歴史的問題」として残しつつも、すべてをそれに還元するのではなく、独自の価値（独特の建築様式をもつ文化財としての価値）を見出す動き」が現れるとする（中島 2013：110）。このような指摘は台湾にも十分当てはまることと思われるが、中島は具体的な分析にまではいたっていない。

近年、台湾における神社の「復興」が進んでいるが、林承緯は自身関わった日本統治時代の神社の歴史展示および祭りの再現などの経験を踏まえ「この十数年来台湾社会および学術界の日本統治期に対する見方が政治社会の成熟、そして異文化の受容とともに変化し」、これまで台湾社会で「負の歴史」とされてきた宗教遺跡の価値が近年急速に転換しているとする⁽²⁾。

林承緯も「台湾社会および学術界の日本統治期に対する見方」が変わった理由として、「社会の成熟」という言葉を使って説明する。この「台湾社会の成熟」というものが、1987年の戒厳令解除後、加速度的に進行した台湾を主体とする「本土化」の進展と密接に関わることは言うまでもない⁽³⁾。歴史教育の分野においては、1994年に小学校に正規の教科として「郷土教学活動」、中学校に「郷土芸術活動」と「認識台湾」の三教科の導入が決定され、台湾の歴史・文化が教えられることとなる。2001年からは、小中学校一貫の新課程が導入され、小学校1年生から必修科目として、閩南語・客家語・原住民言語教育などが導入される。

ただし、こういった郷土教育や言語教育の進展は一方で難しい問題も生み出す。台湾においては、閩南文化・客家文化・原住民文化、さらには戦後台湾にきた外省人がもたらした大陸各地の文化を基盤にした四つのエスニック集団があり、これらの四つの集団間のバランスを取る必要が必然的に生まれたからである。こういった四つの集団間の認識の相違やアイデンティティの相違は、教育に関わる

教師や民間の運動者などの民主的な活動により調整が進められていく。しかし、その調整は必ずしも一つの見解にたどり着くことはなく、「多元的」な様相を持つこととなる。⁽⁴⁾近年では、むしろ多元的な要素を含むことこそが台湾のアイデンティティと認識されるようになってきていると思われる。⁽⁵⁾

学校現場での郷土教育の進展は、地域社会における文化財の保存といった運動へと発展していった。その際に、日本統治時代に造られた建築物も郷土の歴史を構成する一要素として取り上げられる。北投温泉公衆浴場の再生利用の事例を扱った林初梅は、これらの運動は小学校の郷土教育の導入から始まった「一般市民による自発的な行動」と評価している。⁽⁶⁾現代の台湾では、日本統治時代に造られた多くの近代建築などが文化財に指定され再生利用されているが、近年では、木造の日本式建築についても再生利用が進んでいる。こういった日本統治時代の文化財が保存の対象となるのも、その文化財が郷土の歴史を構成する一部分と認識されているからである。

林承緯の指摘でもう一つ注目しておきたいのが、「異文化の受容」という指摘である。つまり、近年台湾で見られる現象は、台湾内部の閉じられた場での現象ではなく、「異文化」と接触し、多様な文化を「受容」する環境の中で生まれたとする。この点は、中島も南洋での神社「復興」の目的の一つとして日本からの観光客誘致という側面があることを指摘し、「一九八〇年代以降の日本経済の経済的発展、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』と言われた時代の日本社会のいわゆる国際化、海外旅行者・出国者の急増という、日本社会の大きな変化という事があって、初めて可能であった」と指摘している（中島 2013：100）。くしくも、両者とも「国際化」「異文化接触」という視点を重視している。

このような指摘は他にも見られる。近年刊行されたばかりの、所澤潤・林初梅編『台湾の中の日本記録 戦後の「再会」による新たなイメージの構築』（三元社 2016 年）の中で、松永正義は「戦後台湾における『日本』は、日本時代からの残存のみでなく、戦後の日台関係の中で普段に補充、更新されていったのではないかと述べ、二つの論点をあげている（松永 2016：55-56）。一つ目は、「60年代以降の日本の経済成長、これにつぐ台湾の経済成長の中で、人的な交流も盛んになっていったが、この時に植民地時代の人間関係がある種のインデックスとして機能し、植民地時代の記録を新たに呼び起こしたのではないだろうか」と、日本統治時代以降の人脈が、戦後の台湾の中における「日本」を補充していったとする（松永 2016：55-56）。現在、台湾で進行している日本統治時代の建築物の再生利用などが、日本統治時代の影響と単純に結びつけられて理解されるケースがあるが、松永の指摘はこういった理解に修正をせまるものといえよう。

松永の指摘するもう一つの論点が、消費文化という視点である。松永は「(戦後の台湾で：筆者補足) 日本の雑誌、書籍などが貸本屋を通じて流布していたこと、また映画、流行歌、テレビ番組などの流入がある。これらはいわば「下」の文化であり、アンダーグラウンドに接続する文化である。こうした、アンダーグラウンドに近い文化が、やがて 90 年代以降消費文化の主流となっていったと考えられる」と、消費文化の重要性を指摘する（松永 2016：55-56）。

松永の一点目の論点である日本統治時代からの人脈は、現在では消滅しつつある。しかし、近年の日台間の経済・学術・観光などの様々な分野での交流はより緊密に進んでいる。さらに、近年ではインターネットやソーシャルネットワークなど、新たなツールによる関係が成立している。日本統治時代の建築物などの再生利用についても、インターネットやソーシャルネットワークなどで情報が瞬時

に共有される時代となっている。このような状況は、海外神社の研究が始まったころは想像もできなかった環境であろう。こういった場でどういうことが議論されているのか、どんな情報が共有されているのかといった問題も一度検討してみる必要があるのではないだろうか。

松永の二点目の論点は、石井健一編著『東アジアの日本大衆文化』（蒼蒼社 2001 年）や酒井亨『哈日族 なぜ日本が好きなのか』（光文社新書 2004 年）が指摘する「哈日」現象と呼ばれる流れに繋がっている。一般的に、これらの研究で対象とされるのは、サブカルチャー系の素材であり、日本統治時代の建築物の再生利用や日本統治時代の評価・歴史認識といった問題とは位相を異にしている。ただし、現在台湾で進行している日本統治時代の建築物の再生利用などの動きを見ると、商業化がかなり進行している面もある。現在台湾では「創意産品」といった歴史や文化に関するグッズなどが生産され、観光地で販売されている。文化財の保存⁽⁷⁾という点、保存運動や運動団体・関係者の軌跡や理論などの分析が中心となることが多い。もちろん、こういった分析は正攻法として進められるべきであるが、こういった運動をとりまく社会の状況というものにも目を向けておく必要があるのではないだろうか。台南市では、近年日本統治時代にオープンした林百貨店がリニューアルオープンし、多くの観光客を集めている。店内では、百貨店にちなんだ創意産品が売られている。屋上には神社があるが、そこには日本の神社の絵馬のように願い事を書いたプレートを吊るす棚が作られ、完全に観光化されている。こういった現象が成立するのは単に文化財保存運動の影響だけではないだろう。

本論では、以上のような視点から、日本の神社、日本統治時代の日本式建築や旧神社などが台湾社会の中でどのように「消費」されているのかを、様々な事例を集め検討していきたい。

II 現代台湾において、

「日本式建築」や「神社」はどのように「消費」されているのか

近年、台湾と日本との間では密接な国際交流が行われている。本章では、台湾人が台湾国内で、どのような機会において日本文化（いわゆる伝統文化）に触れることができるのか、また、その場において、「日本式建築」「神社」（特に鳥居）といったものがどのように扱われているかを、大学における日本文化教育、公的な国際交流の場、商業ベースという三つの場を中心に見ていきたい。

(1) 大学の日本語系学科での日本文化教育

台湾の大学では、日本語や日本文化を学べる学科として、日本語文学系・応用日本語学系の二つがある。もともと、前者は文学研究に比重を置いた学科で、後者は日本語の実社会における応用に重きを置いた学科であるが、近年では学生の就職状況の問題などからその差異は縮まりつつある。この他に、通識教育（日本の大学にかつてあった教養課程）などにも日本語科目が開講されている。また近年では観光系の学科などでも日本語の授業が開講されている。

このような日本語系の学科では「日本歴史」「日本文化」などの正規の授業がある。筆者自身も勤務先で日本歴史や日本地理などを担当している⁽⁹⁾。台湾の日本語系学科で広く使われている『日本の歴史』（歴史学習研究会編 致良出版社 2007 年）というテキストがある。このテキストは日本の通史について簡易な日本語で記述したものである。この本の口絵カラー写真には、太宰府天満宮・靖国神

社・平安神宮・橿原神宮・明治神宮の五つの神社の写真が掲載されている。これに対し、寺については東大寺と大仏が紹介されているだけである。比率にして5対1である。しかも、神社の選択はなぜか近代以後に成立した神社が五分の四を占め、前近代から続く神社は一つというアンバランスな構成になっている。写真の割合からもこの本を編集した台湾人の関心が寺よりも神社に向いていることは理解できよう。

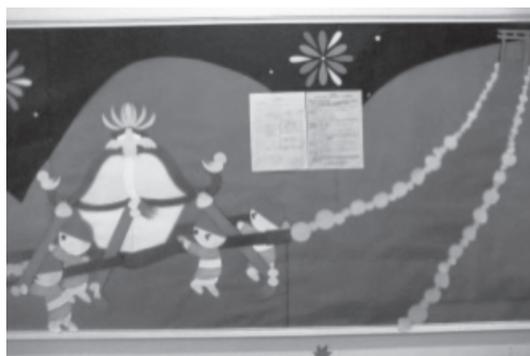


写真1

正規の授業以外に、茶道・華道・浴衣の着付けといった体験型の活動が行われていることが多い。筆者の勤務先でも、社団活動（日本でいう部活動）として同様のことが行われている。こういった日本文化の体験型活動において、日本の神社などの知識を得る機会はあるのだろうか。

2013年、彰化県の大葉大学応用日本語学科では、「推廣國際視野 打造日本神社（國際視野を広めるため、日本の神社を建てる）」というイベントが開催された。⁽¹⁰⁾ 新聞報道によると「学生の国際的視野を広げるために、大葉大学では学内で国際週間活動を行った」と紹介されている。その後、「現在多くの観光客が日本を訪れ神社を参拝する」と学科主任の談話を引用した後、「手水舎」「賽銭」などの説明が記されている。おそらくこの活動の狙いは、日本を訪れる台湾人のために台湾人がよく訪れる場所・接触する文化などについてレクチャーすることなのであろう。そして、台湾人が訪れる場所として神社が取り上げられている。この時の活動を紹介したネット記事では、祭りの再現として、神社の神輿が学生たちにより自作され、それを担ぐ場面の写真が紹介されている。ただ、ネットの解説記事には、「夏祭りの風景」「盆踊り」と紹介されており、仏式のお盆と神社の祭礼が混同して紹介されている。記者が混同したのか、主催した学生の側が混同したのかこの記事からは不明である。⁽¹¹⁾

この大葉大学の活動では、祭りと神社がワンセットになっている。こういった理解のあり方は筆者の勤務先でも確認できる。(写真1)は、2013年に学生が作成した掲示板であるが、そこに御神輿と参道、さらに鳥居が描かれている。このケースも祭りと神社が一体となっている。

台湾中部にある明道大学では2014年3月に、同校の餐旅管理学系の学生が、「日本料理」を主題とするイベントを開催した。⁽¹²⁾ このイベントでは、会場入り口に赤い鳥居が設けられ、日本料理の試食、和太鼓の演奏、日本舞踊などが行われたとされる。

台北の世新大学では、2016年4月13日から15日にかけて、「新安神社保心安」という名前の活動が行われた。⁽¹³⁾ これは、世新大学公共關係暨廣告系の卒業制作小組と新安東京海上産險との共同で行われたイベントで、学内に日式神社鳥居を作り、そこでオートバイの無事故を祈るという活動である。このような事例を見ると、日本語系の学科以外でも神社の鳥居などがイベントの際に作られ、台湾人がそれに触れる機会があることがわかる。

このような活動は学内だけにとどまらず、学外の活動とリンクすることもある。筆者の勤務先では公的機関などが行う日本文化を紹介するイベントに、学生が参加する場合がある。台南市麻豆区にある總爺芸文中心では、毎年10月に「和風文化祭活動」と呼ばれる文化活動が行われている。總爺芸文中心は、明治製糖總爺支社で、1990年代に操業を停止したあと、1999年に台南県の古蹟指定を受



写真2



写真3

け、文化センターとして整備され、2001年に総爺芸文中心としてオープンした。その後、園内に残る日本統治時代の建築物の修復を進めながら、芸術展示、文化活動の場として現在に至っている。⁽¹⁴⁾

「和風文化祭活動」では、浴衣の着付けのような日本文化の紹介のほか、日本の文化に関する展示、台南市の特産品の展示などが行われる。例年、この活動に日本からの団体が加わることもある。その大半は、日本への観光客を誘致することを目的とした観光協会などが中心である。2014年は宮崎県の観光業界が参加し、宮崎の観光地の紹介を行った。この時は宮崎県に伝わる尾八重神楽の実演が行われた。

「和風文化祭活動」で注目すべきは、会場入り口に写真2のような朱色の鳥居が建てられたことである。この鳥居は、現在は撤去されているが、しばらく文化園入り口前に設置されていて、総爺芸文中心の公式パンフレットにもその写真が掲載されている。

このような日本文化に関する活動で鳥居が登場した例は他にもある。台南市新化区の事例を見てみよう。新化区は日本統治時代に建築された「老街」や「街役場」で知られる街である。2014年、この街に残る日本統治時代の武徳殿が復元された。その武徳殿の前で行われたイベントで朱色の鳥居が登場した。

以上のように、大学内の文化活動などで、神社が登場する場面について見てきた。総爺芸文中心の「和風文化祭活動」の際に出現した鳥居や新化区の文化活動に登場した鳥居など、「日本文化の象徴」として建てられていると考えてよいであろう。大葉大学で行われた日本の神社を作るというイベントは、訪日する台湾人のための知識の伝授という実用的な目的のためとされている。背景には、海外旅行先として日本を選ぶ台湾人が急増している事実がある。したがって、ここでの神社の鳥居は、あくまでの台湾の外部にある「日本」の「文化」の象徴として扱われていると見てよいであろう。

(2) 様々な国際交流

現在、台湾と日本との間では様々なレベルでの国際交流が行われているが、日本と台湾の自治体間の交流も盛んである。その事例を見てみよう。台北では「台北温泉季」と呼ばれる活動がある。この活動は2001年から始まり、北投温泉で行われている活動である。⁽¹⁵⁾ この活動は台湾国内に限定された活動ではなく、諸外国からの参加者もある国際的な活動である。2015年には、この活動において「松山市大神輿」という出し物が行われ、神輿の実演が行われた。⁽¹⁶⁾ 松山市がこのイベントに参加して

いるのは、松山の道後温泉が日本最古の温泉であるということ、台北市にある松山空港と松山市が同じ名前であることなどが縁となっている。

このような地方自体レベルの国際交流は近年活発に進んでおり、台湾各地で同様の行事を見ることが出来る。2016年、桃園市で台湾燈會が開催された。この開幕式に合わせて、千葉県成田市から成田祇園祭の「百年山車」がはるばる台湾まで運ばれ、実演を行った。これは、台湾の空の玄関である桃園空港のある桃園市の市長が2015年に来日して、千葉県を訪問した際、台湾燈會への成田市関係者の参加が決まったという（「桃園市政府ホームページ 市政新聞 民国105年1月14日付」）。そして成田祇園祭の山車の一つである「仲之町山車」が解体の上、台湾まで運ばれ桃園で山車運行の実演を行った。⁽¹⁷⁾

筆者は、先に台湾において神社と祭りがセットになって理解される傾向があると指摘した。現在ではこのような国際交流活動を通じて、日本の祭りを台湾の一般の人々が直接体験することができる環境が成立している。したがって、台湾の大学生や一般市民が日本の文化をイメージする際に、神社と祭り（神輿など）を融合させてイメージする可能性は多分にあるのではないだろうか。

(3) 商業施設に見られる日本式建築・神社

次に日本文化をテーマとする商業施設の事例を見てみよう。まずは、2011年に開園した南投県溪頭にある「妖怪村主題飯店」である。この「妖怪村主題飯店」は、宿泊施設と飲食店があるリゾート娯楽施設である。名前に「妖怪」とあるように、妖怪のアトラクションなども登場する。対象としている年齢は低いと思われるが、訪れる客を見ると成人も多い。この「妖怪村」の入り口には、神社の鳥居、奉納酒樽、神社の拝殿などが造られている。神社の鳥居のところには、「鳥居は神の住む聖なる領域と俗なる世界との境界である」と説明がなされている。さらに、奥に進むと斜面に京都の伏見稻荷や山口県の元乃隅稻荷神社を模したと思われる鳥居が建てられている。

この南投県には2016年1月末にもう一つ「桃太郎村」という施設がオープンした。こちらの施設は、昔話桃太郎に出る場面や、日本の街道・神社を模した建築物を建て、日本情緒が味わえるようにした施設である。「日本の街道」「神社」などは、例外なく赤い色で塗られ、赤い提灯が軒先に吊るされている。さらにこの施設には熊本城・北海道の幸福駅など台湾人にもなじみのある日本の観光地の建築物が造られている。さらに「桃太郎村」には、台湾の老街が再現され、その老街には日本式の建物も建てられている。妖怪村と桃太郎村の最大の違いは、対象とする年齢層であろう。妖怪村は子供を対象とするアトラクションなどが出るのに対して、桃太郎村はノスタルジーを売りにする老街を加えることで、年齢対象を広く設定しているものと思われる。もちろん、このような施設については、「コピー主義」「これが日本の建築か？」といった批判がある。⁽¹⁸⁾日本への旅行を経験し、実際の日本建築などを見た経験のある人から見れば、できの悪いしろものであろう。しかし、こういっ



写真4



写真5

た施設が商業的に成立している点にも留意しておく必要が
ろう。

筆者はこれらの施設について、以下の点に留意したい。台
湾人の桃太郎村への批判は、桃太郎村の建物が日本の建築と
は似ても似つかぬものだというものである。この点について
は、筆者も同意する。しかし、筆者は桃太郎村に再現された
老街に注目したい。桃太郎村の老街には日本式の建物が再現
されている。⁽¹⁹⁾ それらの写真を見ると、再現された老街にある
日本式建物の方が「日本の街道」というテーマで再現された
建物（赤く塗られ、提灯を吊るした建物）よりも生活色が感
じられ、現在でも台湾の街角で時折見ることができるとい
う日本式建築に近い雰囲気になっている。「生活色を感じる雰
囲気」

になっているのは、やはり台湾の街角で時折見ることができ
る物であるから、「リアル」に再現することができたのであ
ろう。

「妖怪村」や「桃太郎村」は神社の鳥居や日本式建築などを
観光資源そのものとして使う例であるが、同じような例は
他にも見ることができる。2015年11月に屏東県にある四
重溪温泉公園がオープンした。この温泉公園がある場所は
台湾の恒春半島である。この温泉公園は日本統治時代から
知られた温泉である。このリニューアルに先立ち、台湾鉄
道の一部の列車で「2015年台湾好湯 温泉美食嘉年華
(邦題 2015 湯どころ——台湾温泉美食カーニバル)」の
プロモーションビデオが放送された。⁽²⁰⁾
「2015年台湾好湯 温泉美食嘉年華」と題する活動は、
2015年10月2日、四重溪温泉公園からスタートし、
2016年1月末まで続いた活動である。⁽²¹⁾ 台湾各地に
ある温泉について、一定の基準を満たした約180軒の温
泉旅館を「温泉マーク習得業者」として指定し、温泉と
グルメ、周辺の観光スポットをセットにして売り出そう
とする企画である。

このプロモーションビデオの中に四重溪温泉公園の映像
が登場する。映像の中では、若い男女、温泉の風景の他、
四重溪温泉公園に建てられた赤い鳥居が登場する。ビデオ
の最後ではこの鳥居の前で踊る原住民の男女の映像が
現れ、最後は温泉関係者が登場して終わりとなる。

四重溪温泉公園のリニューアルに先立ち、「民視新聞台」が
この四重溪温泉公園について報道している。⁽²²⁾ それによ
ると、屏東県政府と地元の温泉組合が共同で改修を行い、
改修には2年を費やしたとされる。報道に登場する関係者
によると、「もともとは雑草が生い茂り、人も来ないところ
だった。ものすごく暗く、治安上視角にもなっていた。現
在整備により明るくなってきた。11月14日の開園の時、
夜の景色はきれいだろう」と述べている。このような場所
に鳥居や仏像を建築し、日本の温泉をイメージして整備
を行ったとしている。

以上、現代の台湾社会において台湾人が日本の文化（い
わゆる伝統文化）に触れる場について見てみた。現代台
湾では、日本文化を体験できる場がかなりあることがう
かがえる。そこで体験できる文化は茶道・浴衣の着付け
などが中心となるが、日本の祭りなども体験する機会が
着実に増えている。そして、このような場で、神社の鳥
居などが日本文化のシンボルという形で登場しているこ
とがうかがえる。

ただし、ここで注意しておきたい点が一点ある。それは、これら日本文化を経験する場合は、単純に台湾側が日本文化を輸入しているだけではないという点である。たとえば、総爺文化園や新化の鳥居、妖怪村や桃太郎村、四重溪温泉の鳥居はすべて赤色に塗られている。桃太郎村の中に造られた日本の街道の家も赤く塗られ、赤い提灯が吊るされている。日本の鳥居には赤色（正確には朱色）に塗られた鳥居もあるが、すべてではない。しかし、本章で見たように商業施設などに建てられる鳥居は朱または赤色なのである。

この現象を考える際に参考となるのが、「現地化」という概念である。吳偉明は、「アジアにおける日本の大衆文化ブーム～グローバル化、日本化と現地化をめぐる～」（『日中社会学研究』10号、2002年）の中で、「現地化は日本大衆文化の普及のカギであるといえる。アジアの人々はたいてい、日本から直接日本の大衆文化を受け入れるのではなく、現地化された日本の大衆文化を受け入れるのである」と述べている（吳2002：196-211）。台湾において、商業施設に建てられた神社の鳥居が赤く塗られたり、日本式建築の軒先に赤い提灯が吊るされるのは、ある種の「現地化」と理解できるのではないだろうか。特に、鳥居に関しては「赤色（朱色）」というイメージが支配的になっているように思われる。⁽²³⁾ 仮にこのように考えてみると、桃太郎村の中に作られた台湾老街の中にある日本式建築が、台湾で目にするような形で復元されているのも理解できるのではないだろうか。つまり老街の中の日本建築は、台湾に輸入した「日本」ではなく、台湾の日常生活の一部となっているということではないだろうか。

Ⅲ 現代台湾において、

「日本式建築」や「神社」はどのように「消費」されているのか

Ⅱでは、台湾国内での「日本式建築」「神社」や「鳥居」の消費のされ方の事例を見てみた。いずれも、「神社」や「鳥居」などは日本文化の象徴として理解されているものと思われる。それと同時に商業施設の中に作られた日本式建築や神社の鳥居などについては、ある種の「現地化」が進行していると理解できるのではないかと仮説を呈示してみた。それでは、台湾における日本式建築や鳥居について「現地化」以外の傾向はあるのであろうか。

台湾では、結婚するカップルが結婚記念写真を撮影する際に、単に室内でタキシードにウエディングドレスを着て撮影するだけでなく、様々な工夫をこらして写真を撮影する習慣がある。ブライダル関連の専門店のホームページなどをのぞくと、必ず結婚式の記念写真のコーナーがある。台湾の各地に行くと、その地域ごとに撮影スポットが存在する。その際に日本統治時代に建てられた西洋式建築の赤レンガの前で撮影を行うことも多い。たとえば台南市ならば、旧台南州庁舎（現国立台湾文学館）や旧台南市公会堂などに行くと、撮影中のカップルの姿を見かけることがよくある。

ブライダル専門店「ROYAL 蘿亞結婚精品」のホームページにも結婚写真のコーナーがあり、そこでサンプルを見ることができ⁽²⁴⁾。結婚写真のサンプルを見ていくと、神社の前で撮影した写真も見ることができ⁽²⁵⁾。ただし、写真はいずれも沖縄の波上宮の前で撮影されたもので、手水舎での写真、拝殿前の石段を手をつないで降りるカップルの写真などがある。撮影の際にはカップルは浴衣を着用している。結婚記念写真を海外まで撮影しに行くことも今ではめずらしくない。ここで沖縄の波上宮が

選ばれたのは沖縄が地理的に台湾に近く、「お手軽に日本テイストを体験できる場」だからではない
だろうか。⁽²⁶⁾

「ROYAL 蘿亞結婚精品」のホームページを見ていくと、あきらかに日本統治時代の木造住宅の前
で撮影したと思われる写真が登場する。⁽²⁷⁾「ROYAL 蘿亞結婚精品」のホームページには、「Wedding
Salon」という項目があり、そこに「分享我的日式建築婚紗照（私の日本式建築結婚写真の紹介）」と
いう日本式建築の前で写真撮影を行った利用者の体験談を読むことができる。⁽²⁸⁾その体験談では、
「一生で一度の結婚写真。私の希望は他の人たちと違う感覚の写真を撮りたかった。多くの人たちが
すでに撮影したスポットはいやだ。私は日本式建築の雰囲気が好きだ。だから青田七六の民家を選ん
だ」と述べられている。このケースでは、撮影スポットとして「日本式建築」が選ばれたのは、撮影
によく選ばれるポピュラーな場所と差異化したい、という戦略から選択されている。ここで利用者の
言う「違う感覚」とは何であろうか。一つ考えられるのは、日本統治時代に作られた西洋式近代建築
や台湾式建築が煉瓦などの素材で作られているのに対して、日本式建築が木造である点ではないだろ
うか。

それでは、台湾に残る日本統治時代の神社遺跡での撮影などは行われているのであろうか。台中に
あるブライダル会社「棉花田」のホームページにある作例を見ると、苗栗の通霄神社の社務所の前で
撮影した写真が掲載されている。⁽²⁹⁾残念ながら、この写真にはコメントなどはないが、神社遺跡の前で
写真を撮るのもユニークさを出すための演出なのかもしれない。

以上は民間のブライダル関連会社が撮影しているケースであるが、公的な機関が結婚写真に関わる
ケースがある。嘉義市には日本統治時代の嘉義神社の社務所が残され、嘉義の歴史を伝える資料館と
して利用されている。2015年秋からこの社務所のリニューアルが行われ、2016年2月にオープンし
た。オープンに際して、社務所の前庭と裏庭が日本庭園として整備された。さらに、前庭の塀の内側
には嘉義神社社務所で撮影された結婚写真が陳列された（写真6）。この時、結婚写真の展示が行わ
れたのは、ヴァレンタインデーが近かったためである。⁽³⁰⁾一番古いものは日本統治時代のもの、戦後は
1991年に撮影された写真、それから少し年代が飛んで2010年以降の写真となる。2010年以降の写真
は嘉義市が主催する婚活の際に撮影されたものである。2015年に式をあげた新婦は、「最初のデー
トは嘉義公園でした。嘉義で生まれ育った花嫁にとって、小さいころから遊んだ嘉義公園、嘉義の歴史
を記した資料館しか思い当たらなかった。それで、結婚写真の場所の一つとしました」と述べてい
る。また社務所の日本式建築については「新婦の
実家と一緒に」と述べている。



写真6

今回のイベントも嘉義公園内の旧社務所の前に
ステージが作られ行われた。おそらく、公共空間
である公園で活動を行っただけで、別にその場所
が「神社跡地だから」だったわけではないだろ
う。旧嘉義神社があった場所は、現在は嘉義公園
となっており、市民の憩いの場となり、旧社務所
は歴史資料館として再利用されている。新婦の言
う「新婦の実家と一緒に」という言葉からもわか

るように、結婚写真の撮影スポットとして登場する旧嘉義神社社務所は必ずしも「外国文化」「日本文化」の象徴などではなく、台湾の日常生活の一部になっているのではないだろうか。

IV ソーシャルネットワーク内の動向

(1) ネットによる情報の共有

近年歴史情報デジタル化が急速に進んでいる。主要な大学図書館・研究機関などでは資料のデジタル発信は当たり前のこととなっている。台湾においても、公的機関における情報のデジタル化が進んでいる。文化財に関係するものとしては、「文化部 文化資産局」(<http://www.boch.gov.tw/>)がある。このサイトには現在登録された文化資産の検索システムがあり、神社遺構なども検索可能である。文化財の検索を行うと、関連する情報が「資産資料」「参訪資料」「地図 MAP」「相関報告」「出版品與連結」などの項目に整理されている。「資産資料」の項目では、歴史沿革、その文化財の評定基準、指定・登録理由、住所、管理人、地籍図などの基本情報が掲載されている。「参訪資料」では、公開の有無、推奨する交通機関、もよりの公共交通機関などの情報が掲載されている。交通機関に関する情報が公開されていることから、このデータベースが一般人の参観者への情報提供を重視していることがうかがえる。このほかにも文化部国家文化資料庫 (<http://nrch.culture.tw/>)、「典藏台湾」(<http://catalog.digitalarchives.tw/Search/Search.jsp?QS= 神社建築>)といったサイトで神社に関する情報を検索することができる。

現在は、これら公的機関のデータベースとは別に、民間においても個人ブログなどの形で神社に関する情報が公開・共有されるケースが多い。特に近年ではソーシャルネットワークの普及が進み、ごく一般の人々が手軽に情報を共有できるようになってきている。ソーシャルネットワーク・フェイスブック（以下 FB と表記する）上にも、台湾史等に関するグループが存在する。いくつかのグループでは、日本時代の建築物や神社に関する写真・情報などの共有を行っている。それらをいくつか見ていこう。

「日本治台 50 年史実記録」という名称のグループが存在する。⁽³¹⁾これは日本統治時代の歴史に関する情報を共有するページである。共有される情報は様々で、台湾人個人の家に残る史資料（祖父母の卒業証書、持ち物など）、日本統治時代の写真（台湾人の家に残っていた写真・本に掲載されたもの・ネット上で流通している写真のシェア）、You Tube の映像などあらゆる媒体の情報が共有されている。参加メンバーの国籍は、台湾以外では日本人なども含まれている。2016 年 5 月 14 日現在で、26765 人の参加メンバーがいる。メンバーの水準は様々で、投稿者も定期的に変動があり、定期的に投稿を続ける人、時折投稿する人など関わり方は様々である。若干であるが日本語世代も参加している。

「台湾日式宿舍群近来可好」と呼ばれるグループは、台湾各地に残る日本式宿舍の保存などについて情報交換を行うことを目標とするものである。⁽³²⁾2013 年 3 月 20 日からスタートし、2016 年 5 月 14 日現在で 15300 人のメンバーが加盟している。ここで紹介されるのは日本式建築が中心だが、ときおり日本統治時代の神社の写真などが投稿されることもある。

台北に「秋恵文庫 台湾歴史文物珈琲館」という私設博物館がある。⁽³³⁾これは、台北市にある医師の

林于昉氏が開設した私設博物館で、日本統治時代・国民党時代の様々な文物を集め、展示している喫茶店兼博物館である。FB上にはこの秋恵文庫のページもあり、そこで日本統治時代の写真などが紹介⁽³⁴⁾されている。

(2) 日本統治時代への視線

現在では、このようなサイトで日常的に情報の共有・更新がなされている。共有されている情報は様々である。情報の精度や解釈も様々であるが、ある程度その傾向がうかがえる。いくつか事例を紹介しよう。

1) 産婆の集合写真

2016年2月1日に秋恵文庫のFB上に1940年に撮影された台中の産婆の団体写真が掲載された。2月4日にその写真が「日本治台50年史実記録」上においてシェア⁽³⁵⁾された。シェアした人は写真から見て20代前半であろうか。その人物は以下のようなコメントを残していた。「みなさん、おかしいと思いませんか。台湾では病院で出産するのに、先進国で産婆をつかって家で出産するなんて」というものであった。このコメントに対して、「台湾でも昔は産婆が出産の際には活躍していた」といったコメントが寄せられた。もっともユニークなコメントは「私は日本で生まれたけど、その時は産婆さんにとりあげてもらった」というものであった。

ここで問題にしたいのは、この台湾人が「日本」および「日本統治時代」に対して向ける視線である。この台湾人の認識は、「当時の日本＝先進国→当時の台湾→日本が領有→したがって、台湾は「先進国」である」というものである。もちろん当時の大日本帝国は台湾を領有しており、当時の世界において「先進国」の一つであったのは間違いないであろう。書き込みの内容から見て、おそらくこの台湾人は日本統治時代の歴史について一次資料にあたって理解しているわけではない。しかし、当時の台湾を日本と一体のものとし、「先進国」であると理解しているのである。

2) 山車をめぐる記述

現在、台湾と日本との交流が進み、日本の古典芸能（祭り）などが台湾で実演されることについては既に触れた。このような活動が台湾で行われると、ネット上において日本統治時代の祭りの写真を投稿する人々が増える。2016年2月16日「日本治台50年史実記録」上で一人の台湾人が、桃園市を訪問した成田祇園祭の「百年山車」の記事をシェア⁽³⁶⁾した。おそらく、桃園市で行われた百年山車の出し物に刺激を受けたのであろう。それから3カ月後の2016年5月14日、同一人物が日本統治時代の南投埔里で撮影された山車の写真をシェア⁽³⁷⁾した。そこには「山車 台湾にもあった」と書き込みがなされていた。これなどは、自治体間の国際交流を通じて山車を知り、そこから日本統治時代の台湾に山車があったのかという疑問が生まれ、写真の発見につながったのであろう。現代の国際交流における日本文化の体験が台湾の過去への新たな視線を生み出しているといえよう。

3) 祭りに参加する人に対するコメント

2015年11月1日、「日本治台50年史実記録」上で、一人の台湾人が民視新聞で放映された温泉節

における御神輿の実演の写真をシェアした⁽³⁸⁾。それに対するコメント欄には、「彼ら（神輿を担ぐ日本人：筆者注）は、以前の我々と同じく善良な信徒である。現在の我々の信仰心は不良な要因に挟まれている。しかし、多くの人が以前の良い気風に回帰している」と書き込まれていた。国際交流を通じて日本の文化を知り、そこから視線を日本統治時代へと向け、目の前にいる「神輿を担ぐ現在の日本人」と日本統治時代の台湾人とが全く同じであると理解している。

以上三つの事例を見てみた。いずれの事例とも、日本統治時代の台湾と現代日本とを一体のものとして理解する傾向があることがうかがえる。この傾向は、「日本治台 50 年史実記録」の中では常に見られるものである。

このような傾向は妥当なのであろうか。日本統治時代に刊行された雑誌『大正時報』（1926 年、12 月号）に、台北市樺山小学校校長石川彦太郎が、当時の内地人児童の家庭の宗教状況について語っている。それによると、「台湾の内地人の家庭組織といふものは、内地に於ける内地人の家庭組織とよほど違った点があるのである。一家の神棚とか仏壇などに於ても、今猶七割しかない」「台湾に於いてはお祖父さんお祖母さんが少ないから、神棚や仏壇には蜘蛛の巣が張っているものも多く、一日十五日にも御燈明が上がらない」「台湾神社のお祭りに就て子供を透して参拝の状況を伺って見ても、大抵神社の祭に一家族の者の参拝すると云ふ者が先づ三割位で、他の七割は参拝しない。内地に於て、氏神の大祭に、家族の参拝する者が三割しかないと云ふことは殆どみられ無いレコードと思われる」と、当時の内地人児童の神社参拝の比率が内地と比較すると著しく低いと指摘している。現代の台湾人が思うほど、日本統治時代の在台日本人は熱心な神道信者ではないのである。

日本統治時代の同時代的な資料を引用して、批判してもあまり意味はないかもしれない。なぜなら、もともと「日本治台 50 年史実記録」は、当時の歴史を文字資料を使って実証的に理解しようとするものではないからである。ソーシャルネットワークの性質上、利用者の大半は毎日流れて来る投稿写真を閲覧し、情報を共有し、共感しているだけなのである。ただ、こういった情報をくりかえし共有することから、ネット空間上においては、日本統治時代の台湾と現代日本とを一体のものとする理解が生まれ、共有される可能性は充分にあるのではないだろうか。

(3) 「懐寧」と「好美」

日本統治時代の建築物に対する見方を見てみよう。2016 年 1 月 3 日、「日本治台 50 年史実記録」⁽³⁹⁾に日本式住宅の前で撮影された古いモノクロ写真が投稿された。写っているのは一人の女性と小さな男の子。投稿者は写真に写っている男の子で、この男の子の祖父が撮影したものらしい。さらにこの投稿者は、「30 歳以前まで、私は自分のことを日本人と思っていた」とまで述べている。この投稿に対して数人の人がコメントを書き込んでいる。そのうちの一人で、警察で勤務していたとする日本語世代の人物は、「私の 3 人の子供もこのような日本式住宅で生まれ、成長した」と書き記している。もう一人、台電宿舎に住んでいたと書き込みをした人物は、「湾生（日本統治時代に台湾で生れた日本人）が自分の家を見に来て涙を流していた」と書き込みをしている。ここで書き込みをした人々は、日本式建築に住む機会があった人達である。彼らの書き込みには「懐念（なつかしい）」という言葉が散見される。

これと対照的なのが次の事例である。2015 年 12 月 13 日、「台湾日式宿舎群」上に台南市麻豆区に

⁽⁴⁰⁾
残る日本式建築が紹介されたことがある。この建物は日本統治時代の官舎であった。この写真に対する台湾人のコメントは、「好美（美しい）」「本当に住んでみたい」「保存しろ」というものである。ちなみに筆者はこの日本建築が存在する街に住んでいる。実際に建物を見に行っただが、かなり老朽化して傷んでいる。筆者の感覚ではおせじにも「美しい」といえる状態ではない。しかし、この手の日本建築の写真が投稿されると、まず例外なく「好美」という評価が書き込まれる。なぜ、これほど評価が高いのであろうか。一つはFBの性格上、参加者は、あくまで切り取られた写真を見ているだけなのである。「リアル」に建築物と向かい合えば、別の感想が生まれる可能性があるだろう。コメントの中には、「本当に住んでみたい」というものが多い。これは明らかに日本式建築に居住したことの無い人の発言であろう。「懷寧」を使うか「好美」を使うかの違いは、日本式住宅での「リアル」な生活経験があるかないかの差ではないだろうか。居住した経験のある人は、具体的なエピソードを語るができる（子供を育てた、灣生が来たなど）。しかしそういった経験がない人達は、建物の外観などの美しさや建築物の保存といった方向へ関心が向くのではないだろうか。

2013年9月26日、「台湾日式宿舍群」に、高雄の弘毅新村にある日本式宿舍の写真が投稿された。⁽⁴¹⁾その後、その写真についてコメントが書き込まれた。以下そのコメントを見てみよう。

そうだよ、私は宏南人だ。小さい時からこの辺のこのような古い家で育ったのだ。それで私はこのような建築が好きなのだ。父親がこう言っていたのを聞いたことがある。以前この辺に住んでいた日本人がかつて住んでいた家を見に帰って来た。建物の外観が完全に維持されていて、感激して涙を流したと。

そうだよ。家というものは人が住んでいるのが一番美しい。私のおばあさんが以前住んでいた家は今空き家だ。ただし、ほとんど原型を維持している。今、おばあさんは私が子供のころ住んでいたところに引っ越してきている。しかし、元住んでいた家は取り壊して新しい家を建てた。おばあさんはもう年だから、彼女にとって住むのに快適なことが一番重要なのだ。

上のコメントはかつて家族が日本式建築に住んでいたことがある人の発言である。小さいころから日本式建築に親しみ、今でも関心を持ち続けていることがうかがえる。しかしその一方で、年をとった祖母にとって日本式建築は不便であると述べている。この発言には実際に日本式建築に住んだ経験から来るある種のリアリティが感じられる。現在FB上では、日本式建築の保存を訴える声が多い。しかし、実際にそこで日常生活を送るといことになると、維持管理など様々な面で困難に直面することになる。⁽⁴²⁾

以上のような事例から、日本式建築に興味関心がある台湾人の中にも、(1) かつて日本式建築で生活したことのある「リアル」な実体験を持つ人々、(2) 近年になり、台湾に残る日本式建築のすばらしさを発見した人々、という二つの層が存在していることがうかがえる。さらに、II章で検討した(3) 商業施設レベルの日本式建築で満足するライトな人々を考慮すれば、三つの層が存在していることになる。今後時間が経つにつれ、(1)の層は減少していくだろう。現在、台湾各地で日本式建築の再生利用が進んでおり、(2)の層は増加していくものと思われる。また(3)の層からよりコアな

(2) の層へと成長する可能性もあるであろう。そして、このような日本式建築への関心が、台湾に残る旧神社遺跡へと転じる可能性も十分あるのではないだろうか。

V 神社「復興」をめぐる言説

(1) ソーシャルネット上の言説

先に見た林承緯は、自分が関わった神社展示に関して、台湾の「連合報」などの大陸寄りのメディアでさえ好意的な反応であったと述べ、神社に対する台湾社会の認識変化を強調する。それでは神社の「復興」について反対意見はないのであろうか。台中市の立案した台中神社の鳥居復元については、2015年に洪秀柱が「文化アイデンティティの混同である」と批判した。この時期は、2016年の総統選挙を前にした時期であり、これはある種典型的な外省人の発言であろう。洪の批判を紹介した「自由時報 電子版 2015年4月19日」のページには視聴者の意見が書き込まれているが、そこでの論調は洪に対する批判および戦後の国民党時代への批判である。このような事例を見ると、「神社」というものが台湾において政治的な議論を引き起こす可能性がまだまだあるのかがうかがえる。しかし一方で、「もし、おまえが台湾の海洋文化を知っているなら、包容・開放・多元という考えから始めるべきだ。こういった考えを受け入れることが我々の優れた文化の一部なのだ」という、多元文化主義に立ち、日本統治時代にあった神社も台湾の「多元性」の一部であるという理解も見られる点には注目しておきたい。

2015年に日本人神職の援助で、屏東高士村の神社が「復興」されることとなった。その模様を伝える「自由時報電子版 2015年5月19日」には多数の台湾人が書き込みをしている。内容は賛否両論である。今回の件に批判的なJ・L氏は、李登輝以後、日本統治時代を高く評価する考え方を批判する。蚊の被害の防止にしても日本時代には成功しておらず、国民政府の時代になって成功する。第二次世界大戦終結後の混乱期には日本時代のインフラが役に立つこともあったが、その後は国民政府が手を加えて今の社会基盤を築き上げたのだと主張する。このように批判する側も神社自体に対する言及は少なく、日本統治時代の評価や228事件の評価などが中心となる。⁽⁴⁵⁾

2016年1月10日に、「台湾日式宿舍群」に苗栗にある通霄神社の修復に関する「聯合新聞」の記事がシェアされた。⁽⁴⁶⁾ この記事に対してコメントが記されている。1月10日と12日のコメントに意見が書き込まれ以下のようなやりとりがあった。

- A：全国の神社を復元させよう。
- B：嘉義は無理。日射塔があるから。
- C：日本時代、全台湾で200の神社があった。完全にもとに戻すのは不可能だ。まず台湾の高士神社へ参拝して捐獻しよう。
- D：それはおもしろい。わたしは読者となり、台湾の神社の物語を見よう。
- E：あなたは生命力のある神社を欲しているのか、それとも建物の展示品を求めているのか。台湾の多くの神社は日本時代の末期になって大量に建築された。正直なところ信者の大部分は在台日本人だ。全部復元しても中がからの形式だけができるだけ。なぜならもともと台湾に

は相応の数の神道信者がいないからだ。個人的に思うのは、建物を修復するのは良いと思う。それに遺跡を直接保存するのも一つの文資保存方式だと思う。ギリシャやローマの遺跡は、柱や壁だけが残されている。遺跡をもう一度再建しようという話はない。

A から D までは、肯定的な意見がつづく。ちなみに C の人物は高士神社のお守りの写真を張り付けている。これに対して、E 氏のような発言が飛び出す。この意見は、何のために神社を「復元」するのかということである。現在の台湾には神社神道を信仰する人々が大量にいない。したがって、神社を「復元」しても、そこで信仰が行われることもなく、たんなる建物の展示品になるだけだという主張である。また、「遺跡を直接保存する」という主張は、廃墟になったものには廃墟になった歴史的な経緯があるので、そのまま保存すべきということであろう。⁽⁴⁷⁾ この意見が書き込まれた後、1月12日に次のようなコメントがなされた。

F：「神社」は台湾の文史を代表し、足跡と信仰を残してきた。国や民族などの意識形態を取り除いて、自由で多元的な環境の中で修復すべきだ。

E：神社の建設は日本人の政治的考慮によるものだ。台湾の最初の神社が延平郡王祠を改築したものであることを忘れてはならない。さらに台湾の神社の数が増加するのは日本時代の晩期、日本の公的機関は長栄教会のキリスト教徒に参拝を要求さえしたのだ。話をもとにもどすと、日本は朝鮮でも神社を建てた。神社を保存しているか、それとも取り壊したのか。

F 氏と E 氏の主張をまとめると、F 氏は、「神社」はもともと日本の文化であるが、かつて台湾に存在した文化として「多元文化主義」の立場から、神社の「復興」に賛成している。神社は確かに日本の文化であるが、一時期とはいえ「台湾に存在した文化である」という主張である。これに対して、E 氏の主張は、「神社神道を信仰していた主体はあくまでも台湾にいた日本人であり、台湾人ではない。したがって、現在残っている建築物を修復・保存することには賛成であるが、「復興」までする必要はない」という主張である。その主張の根拠として、長老教会に対する参拝強要のように、当時の台湾総督府の意図は極めて政治的なものであったとする。彼の主張のポイントは「信者の大部分は在台日本人だ」というところであろう。「多元文化」といっても、それは台湾人を主体とする「多元文化」であり、台湾人が主体的に信仰したわけではない神社神道は「多元文化」の枠には入らない、ということであろう。

残念ながら、この後コメントする人がおらず、議論はここで終わることになる。ここまでの議論を見ると、神社の「復興」が政治的・歴史的評価と結びつく可能性もあることがうかがえる。しかし、F 氏のように、「多元文化」の視点から台湾にあった文化として理解する見方があることもうかがえる。ただし、「神社神道」を「宗教」として信仰するか否かという問題が絡むと、日本統治時代においても現代においても、台湾に「神社神道」を信仰する人は少なく、「神社」が「多元文化」の枠内に入るのかどうか、その評価は揺れている部分もある。

このような点が日本式建築と旧神社遺跡をめぐる扱い方の違いではないだろうか。日本式建築については、台湾人が居住し、その中には日本式建築に対してある種の「なつかしさ」を感じる人々がい

ることは、IV章でも指摘した。また、戦後台湾に渡って来たいわゆる外省人の中にも日本式建築で生活した経験がある人々が存在している。⁽⁴⁸⁾外省人たちが住んだ「眷村」に関しては、近年その歴史や文化を保存する試みが行われている。⁽⁴⁹⁾これに対して、日本統治時代の旧神社遺跡に関しては、エスニックグループを越える形での理解があるとは言い難いであろう。

(2) 「復興」する側の主張

それでは、神社の修復や「復興」などに関わっている側の意見はどのようになっているのであろうか。いくつか事例を見てみよう。

張育銓は「遺産做為一種空間識別：花蓮豊田社區遺産論述」(『民俗曲藝』176号、2012年)の中で、花蓮にあった移民村豊田村に残る史蹟の活用について論じている。張育銓は、「この花蓮豊田社区は、日本の移民村として誕生した後、戦後は客家・原住民アミ族の移民が入るなど重層した歴史を持つ独特の空間である」と定義する。そして、張は「日本時代の建築物を空間として保存すべき」と主張する。現在の問題点としては、日本時代の史跡などが「文化資産」として活用されていないとする。張は、豊田社区を、多様な文化が重層するまさに「多元文化的空間」と位置づけ、それを観光などの産業へと発展させる必要があると主張している。

郭俊沛は、「歴史建築通霄神社修復再利用」(『苗栗文献』第42期、2007年)の中で、通霄神社の社務所の修復について触れている。『苗栗文献』第42期のテーマは伝統建築とされ、特集の巻頭言では苗栗は「多様な族群があり、多様な文化が育まれた地」と評価している。この特集号の中に通霄神社の修復の論文が含まれているのであるから、この巻の編集方針に従えば、通霄神社の建築物も「多様な文化」の一つということになる。郭論文では、通霄神社の建築物の再生利用について、神社の建築物を地域の情報結節点と位置づけ、宿舍と社務所については今後も継続的な修復の可能性を探り、その空間を歴史展示に使用する、といった提案をしている。さらに、将来的には教育・研究・観光方面へと展開させていくべきと主張する。郭論文で主張されている方針は、旧嘉義神社社務所を嘉義市史蹟資料館として運営し、この他様々なイベントを行っている嘉義市の運営方針に近いものではないだろうか。これらの論文を読む限り、日本統治時代の神社をめぐる評価などは考慮されていないように見受けられる。それよりも、現段階においてこれらの史跡をどのように有効活用するかに重点が置かれている。その活用の際に重要なポイントとなるのが観光方面、日本でいう「町おこし」「地域おこし」的な視点である。

町おこしという視点から、台東・鹿野神社の事例を見てみよう。鹿野神社は台東鹿野郷にある神社である。ここはかつて移民村のあった場所で、日本統治時代の小学校校長宿舍などが残されている。周辺ではお茶の栽培が行われ、名産となっている。近年、鹿野は毎年6月から8月末にかけて開催される熱気球フェスティバルで知られるようになってきている。⁽⁵⁰⁾さらに、旧移民村跡でも観光整備が進んでいる。2014年5月にこの場所に神社が「復興」されることになった。この「復興」には、行政院農業委員会土木保持局台東分局が資金を提供しているが、ホームページによると今回の「復興」により観光産業の発展が期待されるとしている。⁽⁵¹⁾鹿野神社の「復興」は、花蓮の豊田村と同じようなパターンではないだろうか。⁽⁵²⁾

2015年に高士村に神社の社殿が「復興」された。「チャンネル桜」2015年10月8日の放送にその

経緯が説明されている。それによると、今回の「復興」は、第二次大戦中に出征した原住民の霊を村に迎えるためとされている。祀る神は日本の国家神道の神ではない、と極力政治的・歴史的文脈から距離を取ろうと努力している⁽⁵³⁾。しかし、「チャンネル桜」の放送5分32秒ほどのところで高士村の信用組合長が、神社の「復興」は「村の観光産業にとって価値がある」と述べている。地域の観光産業への寄与という期待もあるのでは⁽⁵⁴⁾あるであろう。

結びに代えて

以上、現在台湾において「日本式建築」「神社」「鳥居」などがどのように台湾人に「消費されているか」を考察してきた。本論で述べたように、現在の台湾人は、様々な文化活動や商業的な活動を通じて、「神社」や「鳥居」といったものに接触する機会があることを確認した。一方、ネットやソーシャルネットワークの世界でも神社に関する情報が共有されている点を確認した。IV章では、2016年に桃園で行われた山車の実演により、山車の存在を知った台湾人が、おなじ山車が日本統治時代にあったのか疑問を持ち、写真を探し当てた事例を確認した。これなどは、現在の日台間の国際交流が、日本統治時代に対して新たな視線を向ける契機になっており、「台湾の中の日本」が現在の国際交流を契機に再発見されている事例といえよう⁽⁵⁵⁾。

ソーシャルネットワークの世界で情報の共有がなされる一方で、認識の相違も生まれる。日本式建築については、生活経験の有無が日本式建築への評価に影響をあたえていることがうかがえる。台湾における神社についても、通霄神社のように「多元文化」という枠の中で再生利用を進める動きもある。このような動きは、神社の建築物を歴史的な評価から切り離して、建築物として評価し、「教育」「観光」方面などの再生利用を進めていく動きと評価できよう。こういった動きは台東・鹿野神社などでも見られる。こういった動きに対してさほど大きな批判が起きないのは、適度に歴史と距離を保ち、観光など地域経済と結びついているからではないだろうか。しかし、神社を「台湾の多元文化」の一つに含めるかについては、疑問の声もある。台湾における神社の「復興」は現在進行形で進んでいる現象であり、今ここでそのような現象が起こる原因を総括することには慎重であらねばならないが、多元文化という土俵の上で、政治性・歴史との距離・地域経済への貢献・その地域の台湾人の意識（地域の過去を追い求める・地域経済の復興など様々な意識）といった複数の要素の絡み合いの中で、「復興」が進んでいるのが現在の状況ではないだろうか。

さて、最後に一つニュースを紹介して終わりにしよう。2016年5月8日の華視CTSテレビでは、「台東40神社淪廢墟 居民抗議啦」というタイトルの報道がなされた⁽⁵⁶⁾。報道の内容は、台東鹿野で神社の社殿が「復興」され多くの観光客を集める一方で、台東には40もの神社遺跡が放置され、ゴミ捨て場になったり倉庫の代わりに使われているという内容である。放送の中では、神社遺跡の前で参拝のポーズをする老婆も登場する。はたしてこの老婆は、以前から個人で参拝を続けていたのであろうか。それとも、鹿野の鹿野神社の社殿が「復興」され、それにともない観光客が増加したことから、かつて神社の前で参拝したことを思い出したのであろうか。いずれにせよ、観光開発目的の神社の社殿の「復興」が、周辺の地域社会の中に神社に対する関心を生み出したことは間違いのないであろう。西村一之は、台湾東部の日本統治時代の祠の跡地に、「神社」様の建物が建てられる動きについ

て、このような動きにより、それまで地域において一貫していなかった日本統治時代の記憶が歴史として再配置されると捉えた（西村 2010）。西村論文から6年が経過したが、華視CTSテレビのニュースで紹介されているように、わずか6年の間にかなりの商業化が進む事態となっている。こういった商業化の流れが今後加速し、外部からの観光客が増加すると、神社に対する認識も変わっていく可能性があるのではないだろうか。いずれにせよ、今後ともこのような動向を注視していく必要があると思われる。

註

- (1) 本論では、現在台湾で起こっている旧神社遺跡における社殿や鳥居の再建を示す場合、「復興」という言葉を使用することにする。この場合の「復興」とは、建築物を正確に元の形に復元することや、神社遺跡を日本統治時代の現状に戻していることを意味しないものとする。
- (2) 林承緯「保護 展示そして再建」、このほかに金常石神社の展示については、『金爪石神社與山神祭』がある。
- (3) 台湾における「本土化」は1970年代あたりから徐々に進展していくが、その概要については、管野敦志『台湾の国家と文化 「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』を参照のこと。
- (4) 林初梅『「郷土」としての台湾 郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』（東信堂、2009年）
- (5) 管野敦志は、多元社会について『「ユニークな台湾文化」』は、中国文化から独立した系統として打ち立てられるものではなく、むしろ「あらゆるマイノリティの権利を重視する多元社会の構築」の理念を文化政策により一層反映させる方向へと重心が移されてきているように思われる。『排除による統合』ではなく、「包摂による統合」が積極的に追及されることで、より台湾の個性・独自性が引き出されていくのではないだろうか」と述べている（管野『台湾の国家と文化 「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』381頁）。
- (6) 林初梅「台湾に現れた三つの郷土教育」
- (7) 近年、日本のアニメに登場する場所を訪れる「聖地巡礼」が人気を持ち、観光雑誌などにも紹介され、観光化が進んでいる。その中には神社も含まれる。「らき☆すた」に登場する埼玉県鷲宮神社などが有名なものであろう。こういったアニメの影響なども考慮する必要もあるとは思われるが、本論では考察の対象からはずすことにする。
- (8) 台湾における日本統治時代の建築物の保存に関しては、上水流久彦「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」、松田ヒロ子「台湾における日本統治期の遺構の保存と再生—台北市青田街の日本式木造家屋を中心に」、石井清輝「植民地時代の遺構をめぐる価値の生成と「日本」の位相—台湾における日本式木造家屋群の保存活動を事例として」などがある。松田・石井論文の骨子を簡潔にまとめると、青田街での運動はあくまでも生活環境を守るのための運動である。日本式建築の保存はあくまでも二次的な産物であり、日本統治時代の記憶の維持・共有を目指しているものではないというものである。なお、前掲の松田・石井両論文には紹介されていないが、『光華』には、「偶然留下の一抔緑 日式宿舍」「老屋日記」「豊田遺事—台湾的日本移民村」という特集が生まれ、そこで青田街の日本式建築保存問題や台湾に残る日本式建築について紹介している。さらに今台湾でブームになっている「湾生」などについても紹介している。筆者はこの雑誌を読んで初めて台湾に残る日本式建築の保存運動や、かつて移民村に住んでいた日本人が戦後も台湾を訪問していた事実を知った。この雑誌は10年以上前に刊行されたものだが、日本人にも台湾人にもさして影響を与えていないと思われる。理由は簡単で、この雑誌が政府刊行の雑誌であり、かつ外国人向けに書かれたものだからである。したがって、この雑誌は大学の中国語センターなど外国人が多い公的機関などに配布されることが多い（書店でも販売はされているが）。したがって平均的な台湾人がこの雑誌を手にする機会は少ないものと思われる。このような良質な特集が目立たないところにも、国際間の情報発信の難しさを感じる。

- (9) 筆者自身も、台湾首府大学応用外国語学科日本語組における日本歴史の授業で、嘉義市にある旧嘉義神社にフィールドワークに行ったことがある。その時の授業の目的は、日本の宗教の理解、日本式建築の理解、台湾の日本統治時代の理解などであった。くわしい授業の内容等については、「台湾の日本語系学科におけるフィールドワーク型授業について～台湾首府大学応用外国語系日本語組における「日本歴史」を事例にして～」、「關於大學日本史課程之理論與實踐—以舊嘉義神社之調查為例」などを参照のこと。ただし、この時の筆者の活動も、ある意味では松永の言う「補充される日本」「更新される日本」と同じ影響を学生に与えてしまったかもしれない。
- (10) 『大紀元』電子版 2013年12月30日、2016年4月28日閲覧
<http://www.epochtimes.com/b5/13/12/30/n4046807.htm>
- (11) このような点を、台湾人の日本に対する理解の浅さといってしまうのであろうか。たとえば筆者の手元に日本語学校「和趣国際日本語学校」が2016年7月に開催予定の「2016日本夏季体験遊学」の宣伝ビラがある。そのビラには、文化体験として「伝統祭典・神社・浴衣・回転ずし・寿司作り体験」などの項目が並んでいる。さらにビラには浴衣を着た女性、花火の絵が描かれている。ここにある「伝統祭典」はいわゆる盆踊りなどの夏祭りを指すものと見てよいであろう（東京の場合、盆が7月の場合があるので、時期的に盆踊りであろう）。したがって、夏祭り・花火・神社などを結びつけて理解するのは、台湾側の理解の問題だけではなく、日本の語学学校や大学の日本文化体験などのプログラムが影響をあたえている可能性もある。
- (12) 「明道大学ホームページ」2016年5月7日閲覧 (http://www.mdu.edu.tw/20140409_1/)
- (13) 「中央通訊社」2016年4月14日 2016年5月7日閲覧
<https://tw.news.yahoo.com/%E4%B8%96%E6%96%B0%E7%94%9F%E6%89%93%E9%80%A0%E7%A5%9E%E7%A4%BE%E9%B3%A5%E5%B1%85-%E5%AE%A3%E5%B0%8E%E6%A9%9F%E8%BB%8A%E4%BA%A4%E9%80%9A%E5%AE%89%E5%85%A8-032706984.html>
- (14) 總爺藝文中心について、日本語で手軽に読める文献としては、大谷渡『台湾の戦後日本 敗戦を越えて生きた人びと』第6章「製糖工場跡の出会い」を参照のこと。
- (15) 「2014年 台北温泉季」『城市通 citytalk 活動情報第一帖』2016年5月1日閲覧
<http://www.citytalk.tw/event/208400-2013+%E5%8F%B0%E5%8C%97%E6%BA%AB%E6%B3%89%E5%AD%A3>
- (16) Yahoo 奇摩旅遊 2016年5月1日閲覧
<https://tw.travel.yahoo.com/news/%e6%88%80%e6%88%80%e6%ba%ab%e6%b3%89-2015%e5%8f%b0%e5%8c%97%e6%ba%ab%e6%b3%89%e5%ad%a3-%e6%92%9e%e8%bd%8e%e7%a5%ad%e5%85%b8%e6%b9%af%e6%b3%89%e9%a5%97%e5%ae%b4-000500598.html>
- (17) 「百年山車來台 台灣燈會現日本祇園祭」中央資訊社 2016年1月14日、2016年5月3日閲覧
<https://tw.news.yahoo.com/%E7%99%BE%E5%B9%B4%E5%B1%B1%E8%BB%8A%E4%BE%86%E5%8F%B0-%E5%8F%B0%E7%81%A3%E7%87%88%E6%9C%83%E7%8F%BE%E6%97%A5%E6%9C%AC%E7%A5%87%E5%9C%92%E7%A5%AD-095521835.html>
- (18) 「妖怪村 29倍大！ 南投新景點桃太郎村有合掌屋、熊本城」旅行サイト遊旅雲、2016年4月24日閲覧
http://travel.ettoday.net/article/636951.htm?from=fb_et_news
- (19) 「boMb01」2016年1月25日、2016年4月29日閲覧
<http://www.bomb01.com/article/21084/%E8%AE%93%E5%A4%A7%E5%AE%B6%E6%9C%83%E6%99%82%E7%A9%BA%E9%8C%AF%E4%BA%82%E7%9A%84%E5%8F%B0%E7%81%A3%E3%80%8C%E6%A1%83%E5%A4%AA%E9%83%8E%E6%9D%91%E3%80%8D%E5%A4%9A%E5%B9%BE%E5%A4%A9%E5%B0%B1%E9%96%8B%E5%B9%95%EF%BC%8C%E5%85%89%E7%9C%8B%E7%85%A7%E7%89%87%E9%83%BD%E6%9C%83%E6%87%B7%E7%96%91%E3%80%8C%E9%80%99%E7%9C%9F%E7%9A%84%E4%B8%8D%E6%98%AF%E6%97%A5%E6%9C%AC%E5%97%>

8E%EF%BC%9F%E3%80%8D%EF%BC%81

(20) この映像の一部は You Tube でも見ることができる。

<https://www.youtube.com/watch?v=esh6NiNv0Zc>

(21) 公式ホームページ「台湾好湯 温泉 美食」2016年5月3日閲覧 <http://taiwanhotspring.net/>

(22) <https://www.youtube.com/watch?v=hEA438fbqlE>

(23) 現在、台湾には日本統治時代に造られた神社の鳥居がいくつか残っている。新北市汐留にある汐留神社の鳥居は朱色である。しかし、この鳥居が日本統治時代から朱色であったかは確認していない。筆者の管見の限り、汐留神社の鳥居以外で朱色の鳥居は現存していないと思われる。なお、高雄市岡山区の岡山公園（日本統治時代に岡山神社があった場所）に、近年鳥居が「復元」された（公園の解説板によると「整修回原貌」とある）。この鳥居は朱色であるが、日本統治時代の岡山神社の鳥居が朱色であったかどうか筆者は確認していない。近年、林田神社、鹿野神社、高士神社などに「復興」された鳥居はいずれも朱色ではない。2016年7月31日、「日本治台50年史実記録」に某台湾人によって高士神社の鳥居について、「なぜ、色が赤ではないのか」というコメントが書き込まれた。

https://www.facebook.com/permalink.php?story_fbid=313346159000048&id=100009739985793

2016年8月4日閲覧このようにネット上には、鳥居=朱色（赤色）という認識を持っている台湾人がかなりいるように思われる。おそらくこのような認識は、観光雑誌などで紹介される伏見稲荷大社の鳥居や山口県の元乃隅稻荷神社、世界遺産に指定された厳島神社などのイメージが強いからではないだろうか。

(24) 「ROYAL 蘿亞結婚精品」ホームページ 2016年5月6日閲覧 <http://taipeiroyalwed.tw/>

(25) 「ROYAL 蘿亞結婚精品」ホームページ 2016年5月6日閲覧

<http://taipeiroyalwed.tw/PhotoGraphy-2/page-38>

(26) 上水流久彦は、「対馬海峡から見る台湾と八重山の『交流』」で、沖縄・八重山などへ観光に訪れる台湾人の期待する「日本像」が、日本本土の食文化であったり、日本ならどこでも買うことができる薬や嗜好品であり、台湾人を迎え入れる八重山側の人々との間に著しいギャップを生み出す事例を紹介している。ここで紹介したブライダル会社の企画も、沖縄で撮影を行うが、求めるものは「沖縄の文化」ではなく、「日本」の「神社」なのであろう。

(27) 「ROYAL 蘿亞結婚精品」 2016年5月6日閲覧 <http://taipeiroyalwed.tw/PhotoGraphy-2/page-16>

(28) 「ROYAL 蘿亞結婚精品」 2016年5月6日閲覧

<http://taipeiroyalwed.tw/WeddingSalon/content-217#.VyslatFf3IU>

(29) 「棉花田」ホームページ 2016年5月6日閲覧 http://cfwedding.com.tw/?page_id=1014&paged=7

(30) この活動については、嘉義市ホームページを参照のこと。2016年4月29日閲覧

http://www.chiayi.gov.tw/2015web/04_hot_news/content.aspx?id=46909

(31) 「日本治台50年史実記録——失われた日本治台50年の歴史をさがし求めて」

<https://www.facebook.com/groups/boo15212004/>

(32) 「台湾日式宿舍群近来可好」 <https://www.facebook.com/groups/176223359193164/>

(33) 「秋恵文庫 台湾歴史文物珈琲館」については、下記「台北ナビ」のページを参照のこと

<http://www.taipeinavi.com/food/677/>

(34) 「秋恵文庫 台湾歴史文物珈琲館」FB <https://www.facebook.com/FormosaMuseum>

(35) 「日本治台50年史記録」

<https://www.facebook.com/groups/boo15212004/permalink/1238791679468605/> 2016年5月29日閲覧

(36) 「日本治台50年史実記録」2016年2月16日、2016年5月29日閲覧

<https://www.facebook.com/groups/boo15212004/search/?query=%E5%B1%B1%E9%89%BE>

(37) 「日本治台50年史実記録」2016年5月14日、2016年5月29日閲覧

<https://www.facebook.com/groups/boo15212004/permalink/1310145892333183/>

(38) 「日本治台50年史実記録」2015年11月1日、2016年5月29日閲覧

- <https://www.facebook.com/groups/boo15212004/permalink/1185959404751833/>
- (39) 「日本治台 50 年史実記録」2016 年 1 月 3 日、2016 年 5 月 29 日閲覧
<https://www.facebook.com/groups/boo15212004/permalink/1220317787982661/>
- (40) 「台湾日式宿舍群」2015 年 12 月 13 日、2016 年 5 月 29 日閲覧
<https://www.facebook.com/groups/176223359193164/permalink/554704378011725/>
- (41) 「台湾日式宿舍群近来可好」2013 年 9 月 26 日、2016 年 5 月 29 日閲覧
<https://www.facebook.com/groups/176223359193164/search/?query=%E5%BC%98%E6%AF%85%E6%96%B0%E6%9D%91>
- (42) 前掲『光華』の「老屋日記」には日本式建築を維持していくための苦勞についても記されている。
- (43) 「自由時報 電子版 2015 年 4 月 19 日」2016 年 5 月 29 日閲覧
<http://news.ltn.com.tw/news/politics/breakingnews/1291930>
- (44) 「自由時報 電子版 2015 年 5 月 19 日」2016 年 5 月 29 日閲覧
<http://news.ltn.com.tw/news/world/breakingnews/1322068>
- (45) この点はかなり重要ではないだろうか。日本統治時代を批判するにしても、評価の基準は「台湾をより近代化させたのはどちらか？」という評価軸なのである。こういった評価が登場するのも、台湾が 90 年代以降急激な経済成長を成し遂げたからではないだろうか。日本でも 1970 年代にいわゆる「近代化論」というものが登場するが、それと同じ傾向であろう。
- (46) 「台湾日式宿舍群近来可好」2016 年 1 月 10 日 2016 年 5 月 29 日閲覧
<https://www.facebook.com/groups/176223359193164/permalink/565280820287414/>
- (47) この E 氏について、FB の経歴によると、2007 年まで高校在学とあり、その記述が正しいなら現在 20 代となる。台湾を主体とする歴史教育を受けた世代である。
- (48) 前掲大谷渡『台湾の戦後日本 敗戦を越えて生きた人びと』（東方出版、2015 年）の中には、外省人と結婚した本省人の回想が収められており、そこでは日本式建築に居住していたと記されている。
- (49) 高雄では、高雄市政府文化局が主導する「以住代護人才基地」と呼ばれる活動が展開されている。「眷村」跡に残る建物に希望者をつのり、そこに居住して建物を守る住人を選出する。市政府は建物の改築に必要な一定額の補助を出し、「眷村」自体を保存していく政策を展開している。もちろん、「眷村」の保存となると、そこで主たる保存の対象となるのは戦後外省人が来てからの歴史が中心となる。この点はすでに松田ヒロ子論文が指摘している。ただ、日本式住宅が保存対象となる点は神社とは異なるであろう。高雄市政府が進めている方法は、「公募」により保存に関わる人材を募集する点が特徴であり、この方式により地域の歴史がどのように継承されていくのかについては、今後の検討が待たれる。くわしくは、ホームページ「以住代護人才基地」を参照のこと。
[http://khvillages.khcc.gov.tw/home02.aspx?ID=\\$4002&IDK=2&EXEC=L](http://khvillages.khcc.gov.tw/home02.aspx?ID=$4002&IDK=2&EXEC=L)
- (50) 台北ナビ 2016 年 5 月 23 日閲覧
<http://www.taipeinavi.com/play/456/> <http://www.taipeinavi.com/special/5055735>
- (51) 行政院農業委員会土木保持局台東分局ホームページ 2016 年 5 月 22 日閲覧
<http://eng5.swcb.gov.tw/content.asp?Aid=1168>
- (52) 神社の社殿や鳥居の「復興」までには至らないが、各自治体レベルで旧神社跡地の整備を行っている事例は他にもある。高雄の旗山では、2011 年から 3 年かけて武徳殿の修復とともに旧旗山神社の参道などが修復された（『KH STYLE 高雄款』No 3）。すでに紹介した台南市新化区では、老街と日本統治時代の町役場の建物を中核としながら、武徳殿・日本式宿舍などを復元し、2015 年に「新化大目降文化園区」としてオープンした。新化ホームページによると、「文化方面においては、頼市長が進める新化大目降文化園区に関して、新化的楊達文學館、歐威電影館、演藝廳、老街、街役場、武徳殿及日式宿舍群、奉安殿、公會堂、鍾家古厝、蘇家古厝及新化神社等の古跡や歴史建築物を整合して、柔軟な文化展示活動を行い、ふたたび台南の文化首都としてのソフトパワーを示していきたい」と説明している 新化区ホームページ 2016 年

5月7日閲覧 <http://www.sinhua.gov.tw/?menu=about>。

このホームページによると神社も対象に含まれている。ちなみに、「大目降」とは原住民言語での名称である。原住民の時代・清朝時代・日本統治時代・国民党時代の映画産業などすべての時代を網羅しており、かならずしも日本統治時代を特化しているわけではない点に注意したい。

(53) 「自由時報 電子版 2015年5月19日」など台湾の新聞では、「国家神道の神」という言葉が登場し、そのような神は祀らないと説明されている。「自由時報 電子版」には、今回の神社「復興」に尽力した日本人神職佐藤健一氏自らの書き込みがあり（ただし日本語）、祀るのは「パイワン族の祖先神と土地の神です。日本の神は祭りません」と述べている。皇民化時期の神社参拝の強制といった問題とは別であるということ強調している。

(54) 高士神社のFBページを見ると、2016年5月に鳥居が建立され、「鳥居写真撮影コンテスト」という案内が掲示されている。

<https://www.facebook.com/kuskus0701/?fref=ts> 2016年5月30日閲覧

おそらく、今後この神社を維持していこうとすると、なんらかの観光地化は避けることができないのではないだろうか。そもそも日本国内の神社でもあっても、「観光的」な参拝客がその地域に落とす経済的な利益を無視することはできないからである。

(55) 高士村神社のFB、2015年12月30日の書き込みに、王某氏が、この神社に祀られている祭神は何かと質問している。この人物は、筆者の勤務校の卒業生で、今日本の語学学科に在籍している人物である。彼のFBページには日本の神社写真が多数掲載されている。日本に滞在することにより、神社の知識を増やした台湾人が、自分の国にある神社遺跡に関心を向けるようになってきている。国際化にともなう「日本の補充」に台湾人自身が積極的に関わるケースも今後増えるかもしれない。

(56) 2016年5月8日の華視CTSテレビ「台東40神社淪廢墟 居民抗議啦」2016年5月31日閲覧

<http://news.cts.com.tw/cts/general/201605/201605081749087.html#.V00kMD9f3IU>

参考文献

石井清輝「植民地時代の遺構をめぐる価値の生成と「日本」の位相——台湾における日本式木造家屋群の保存活動を事例として」(所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記録 戦後の「再会」による新たなイメージの構築』三元社、2016年)

石井健一編著『東アジアの日本大衆文化』(蒼蒼社、2001年)

郭俊沛「歴史建築通霄神社修復再利用」(『苗栗文献』第42期、2007年 70-75)

上水流久彦「対馬海峡から見る台湾と八重山の『交流』」(『白山人類学』14号、2011年 31-51)

同 「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」(『アジア社会文化研究』8号、84-109)

吳偉明「アジアにおける日本の大衆文化ブーム～グローバル化、日本化と現地化をめぐって～」(『日中社会学』10号、2002年 196-211)

酒井亨『哈日族 なぜ日本が好きなのか』(光文社、2004年)

管野敦志『台湾の国家と文化 「脱日本化」・「中国化」・「本土化」』(頸草書房、2011年)

行政院新聞局『光華』(第30巻6号、2005年6月 中国語・日本語版)

高雄市政府新聞局『KH STYLE 高雄款』(No 3、2015年)

武知正晃「台湾の日本語系学科におけるフィールドワーク型授業について～台湾首府大学応用外語学系日語組における「日本歴史」を事例にして～」(『國立臺中科技大學 2012文化 語言 教學 國際學術研討會 論文集』出版單位 國立臺中科技大學語文學院 應用日語系 應用英語系 應用中文系、2012年)

武知正晃「關於大學日本史課程之理論與實踐——以舊嘉義神社之調查為例」(『嘉義研究』第七期、2013年 11-58)

張育銓「遺産做為一種空間識別：花蓮豐田社區遺産論述」(『民俗曲藝』176号、2012年 193-231)

中島三千男『海外神社跡地の景観変容』(御茶の水書房、2013年)

西村一之「台湾東部における歴史の構築——「祠」から「神社」へ——」（『日本女子大学紀要 人間社会学部』第21号、2010年）

松田ヒロ子「台湾における日本統治期の遺構の保存と再生——台北市青田街の日本式木造家屋を中心に」（蘭信次『帝国以後の人の移動——ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版、2013年）

松永正義「戦後台湾における日本語と日本イメージ」（所澤潤・林初梅編『台湾のなかの日本記録 戦後の「再会」による新たなイメージの構築』三元社、2016年）

林初梅『「郷土」としての台湾 郷土教育の展開にみるアイデンティティの変容』（東信堂、2009年）

林初梅「台湾に現れた三つの郷土教育 郷土探し、そして植民地時代の「遺緒」との出会い（檜山幸夫編『歴史のなかの日本と台湾 東アジアの国際政治と台湾史研究』中国書店、2014年）

林松永「保護、展示そして再建——台湾に残る日本統治期の宗教遺産」（京都大学人文科学研究所『人文科学報』、2015年12月 21-34）

歴史学習研究会編『日本の歴史』（到良出版社、2007年）

備考

本論は、2016年2月27日 神奈川大学横浜キャンパス1号館で開催された「神奈川大学非文字資料研究センター主催 2015年度第2回公開研究会」での報告を論文化したものである。論文化にあたり、タイトルについては、復興の文字に「」を付けた以外はそのままとした。内容については、当日報告した内容を一部削除し、新たに資料を追加した部分があるが、基本、報告当日の内容を生かす形にして文章化した。当日、台湾師範大学蔡錦堂先生、県立広島大学上水流久彦先生のお二人からは、有益なコメントを頂いた。執筆者の怠慢と能力不足のため本論に生かせなかった部分が多々あるが、今後の研究に生かしていきたいと思う。また、査読を担当していただいた方にも感謝の言葉を述べたい。

本論脱稿後、台湾における神社について二本の論考が発表された。一つ目が、ジャーナリストの野島剛氏の「リノベで復活する台湾の日本神社——歴史のなかの「自分探し」が背景に」（YAHOO ニュース アジア・レポート記載記事（1） <http://news.yahoo.co.jp/feature/245> 2016年7月7日）である。野島氏はこの記事の中で、「リノベ」という言葉を使用している。近年の日本式建築の再生利用などを念頭において、「リノベ」という言葉を使ったようである。筆者の使った「復興」という言葉は重々しいイメージがあるが、野島氏の「リノベ」という言葉の方が軽い響きがあり、台湾の現状にはマッチしているように感じられる。

野島氏は、鹿野神社について、「こぎれいな木造の社殿と鳥居が、公園のような平たく広い空間に突然現れる。中華風の灯籠も混在する。荘厳な神社がよみがえったというより、テーマパークのようなイメージである」と感想を漏らしている。この「テーマパークのような」という感想に注目したい。筆者は本論の中で「桃太郎村」の神社をある種の「台湾化」ではないかと仮説をたてた。野島はレポートの中で、「私たちは信仰のために神社を再建するのではなく、地域の歴史を後世に残すために再建するのだから、社殿をつくるのは変だと思いました」という、林田神社の「リノベ」に関わった人物の言葉を紹介している。「桃太郎村」はまさしく「テーマパーク」なのだが、鹿野神社や林田神社・玉里神社もある種の「台湾化」した神社と理解してもいいのではないだろうか。

また、野島氏は「台湾で神社の復活をどう受け止めるか政府部門ごとに異なる見方が存在する」と指摘している。研究会当日も蔡錦堂先生は、いかなる形での神社の復元には反対の立場であると発言した。その一方で、政府の公的機関から許可が出ているのも事実である。今後、各政府機関の解釈の違いなどについても調査する必要があると思われる。

二つ目の論考は、『琉球新報』9月29日・10月1日に掲載された龍谷大学松島泰勝氏の「台湾 『再皇民化』の現場を歩く 上中下」である。松島氏の主たる論点は、現在の台湾独立運動について論じたもので、現在台湾で進行している神社の「復元」を「行政主導」の「再皇民化政策」と評価している。だが、本論や野島氏の論考でも見たように現在台湾で進行している神社の「復元」を「行政主導」と理解することには無理がある。松島氏の論考については、機会を新ためて検討したいと考えている。